

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第百廿二号
平成二十九年十二月一日発行(第百二十卷第十一号)



俳句随想〔四百二十六〕

汀子

四百二十六回まで、汀子の俳句随想をホトトギスの読者にお届けし、ご意見を頂き、お励ましを頂いて来たこと、どんなに心強く、勉強させて頂いて来たかと感謝の気持ちで一杯でございます引続き、主宰稲畑廣太郎が担当し、「ホトトギス」の指針となる、「俳句随想」を書かせて頂くことになります。どうぞ読者の皆様、「ホトトギス」のために、主宰にお力をお貸し下さいませ。百歳以上の人口が六万人を超えたとニュースが報じて居りました。若い世代の人々に阿るのではなく、私たちが学んできた、伝統ある俳句の道、花鳥諷詠、客観写生の道、魅力ある俳句の教えを、伝えて行くための努力を惜しまないホトトギスの進むべき道として行きたいと存じます。

一年間に十一ブロックの地方に於て、勉強会が開催されます。私も出来る限り出席して共に学んで行きたいと願って居ります。そして、その地の皆様にお目にかかり、俳句を語り、切磋琢磨して参りたいものと願って居ります。

俳句は自然を詠む詩であります。今、地球の自然が壊されて行くのではないかと危惧されていて、こればかりは人間が謙讓の心を取り戻し、地球に対してしなければならぬことがあるのではないかと思えます。最もその事を感じ、知っているのは、私たち花鳥諷詠の俳句を勉強しているものではないでしょうか。自然から何を学び、何をして行かなければならないか、俳句を通して勉強して参りましょう。素晴らしい未来へ向けて！

句日記 汀子

平成二十八年十二月三日 芹屋ホトギス会

ふと忘れぬしは師走でありしこと
会場に溢れし師走の会となる

十二月四日 下萌句会

木苑鳴いて夜の静寂を深めけり
おでん煮て又出掛けるを問はれけり
枯萩の紅白もなく刈られけり
掃き寄せて掃かずに置くも落葉かな
十二月四日 「円虹」新年句依頼

十二月五日 ロイヤル俳壇

寄鍋に忽ち本音行き交へる
冬木立ひそめし音に包まるる
寄鍋と聞けば出席すること
快晴の届かぬ辺り冬木立

十二月六日 有恒新年句会

はや過ぎてあし一年や年忘
この庭の春秋間はん散紅葉
終の色散るほかほなし庭紅葉
雲右往左往冬日の出て来たこと
枯庭といへぬ彩りありしこと
戻れば色現はるる冬紅葉
青佳さんけんさん偲ぶ年忘
十二月六日 無名会
時雨雲より現はれて太陽よ
冬の苑色を尽せるものばかり
冬木立より又一人又一人

寒さとは歸路を思ひしこととして
稿債の残つてをりし師走かな
戻れば消え日当れば冬紅葉

短日や三つの会の二つ目に
十二月六日 伝俳忘年句会

又会へて師走心を寄せ合へる
星博士より給はりし新曆
三つ目の会は短日暮れてゐし

十二月八日 アネモネ句会

一年の集大成となる焚火
邂逅の友の集へり漱石忌
続けゆく山会も又漱石忌

マスクしてゐても確かに彼なりし
十一月九日 工業倶楽部

日当りの寒さの消えてゆく時間
冬の旅快晴といふ心あり
十二月十日 九州ホトギス俳句大会前日句会

若き日の記憶の糸をほどく冬
十二月十一日 九州ホトギス同人会

長崎の人は健脚冬ぬくし
長崎の冬晴といふ俯瞰あり
クリスマス近き聖堂祈りつつ

十月十一日 九州ホトギス俳句大会

旅心消して家路につく師走
よべ俯瞰せし街の灯の消え師走
十二月十三日 大阪倶楽部

運転の師走の街の混雑に
鴨の湖ほとりに宿りたる会に

煤逃の一人加はる句会かな
枯木立坂多き街俯瞰して
渋滞の雨に加へて師走かな

ふり返る師走の旅となりしこと
渋滞を抜けて師走の街に入る
十二月十三日 綿業倶楽部

短日雨を呼びたる師走かな
十二月十四日 序句 藤井啓子句集

先生も輝いてをり去年今年
十二月十五日 清交社

快晴といふほかは無き冬の空
息白く駆け込みて来し一人かな
注文の届けられたる日記買ふ

冬の空山の稜線浮き立たせ
街どこも光のるつばクリスマス

皆心華やぐ句会 年忘
十二月十六日 時雨句会

虎落笛聞きつつ夜を一人かな
外の音障子の隔つ暮しかな
十二月開き直つてをりにけり

虎落笛一人暮しを樂しまむ
変はりなき一人の暮し障子の間

あつて無き如く障子を開け放つ
十二月二十一日 夏潮句会

刻々の日暮と夜明 今日冬至

これ以上落葉することなき庭に
冬ぬくき今日は庭へと誘はむ
山会を世に示さばや春を待つ

落葉掃き残して今日の客を待つ
存在のやうやく満天星冬紅葉

約束の虚子の筆なき屏風かな

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年十一月一日 蕉心会

変幻の天気も師走らしき首都
冬うらら昨日は近江今日は江戸
神迎して解けゆく杜の黙
水溜りわざと踏む子や冬日和
来年は本厄となる師走かな
昨夜近江時雨発ち今朝江戸しぐれ
街騒に吸ひ込まれゆく神楽笛
空使ひ切つて綿虫浄土かな

十一月四日 野分会青屋例会

餅焼いて昨日を遠くしてをりぬ
餅を食ふ待降節の一と日かな
浜千鳥 鶴流れ来し昔あり

十一月四日 青嵐会青屋例会

熱燭を断ちダイエツト成功す
梢の先空に戻して冬木かな
冬木見る昨日誕生日の君よ
熱燭をワインに替へて寿
命秘め冬木は風を奏でをり

十一月六日 カトリック新聞選者吟

木の葉舞ふ待降節に入りてなほ
十一月八日 土筆会

名園の赤より紅へ冬ざるる

明るさを秘めて千両日を弾く
千両や色無き庭を灯し初む
湯ざめするほど新幹線遅れけり
鴨の陣皇居の濠を知り尽し
湯ざめして三十八度五分の熱
湯ざめするとも朝風呂を強ひる母
雲の上歩いてゐるやうな湯ざめ
父の歳超えて十年漱石忌

十一月十一日 九州ホトトギス同人会、大会

クリスマス準備司教座大聖堂
長崎の坂寒天を貫ける
冬凧や武蔵生れしはあの辺り
寒灯を揺すり長崎ぶらぶら節
冬帝に解かれてゆく星の黙
待降節第三主日冬日和
十一月十二日 朝日カルチャー若草句会

セーターの網目の一つづつに恋
セーターを解きて終るほどの恋
セーターの赤に勝負を賭ける君
転ぶこと覚えスキーを学びけり

十一月十五日 登高会

水鳥の千羽に水面引き締まる
長旅に疲れし足袋を洗ふ虚子
水鳥の数に大琵琶嵩上げて
水鳥の即かず離れず湖中句碑
足袋履いて十七代目現はるる

十二月十六日 北國文芸新年吟

雑煮喰ふ老母は卒寿我は古稀
十二月二十五日 青嵐会東京例会

猫二匹褥としたる落葉かな
しらじらと降誕祭の朝かな
園師走ダックスフントてふ歩幅
昨夜の星一つ残してクリスマス
十二月二十五日 野分会東京例会

餅焼いて恋を捨てたる女かな
小夜千鳥星座散らしてゆきにけり
遠千鳥声に故郷近づけて
十二月二十七日 カトリック新聞選者吟

十二月二十七日 若水句会

山眠る百万ドルの夜景抱き
粕汁に酔うて酒屋の四代目
その中に天使の涙霽降る
丸ビルの天辺揺すり霽降る
酒の粕虚子の名付けし銘酒かな
十二月二十八日 目黒学園句会

数へ日や訃報は容赦なく続き
セーターを解けば明日が見えて来る
金屏風心に立てて句座終へる
山の風川の風受く屏風かな
数へ日や仕事の山を崩しつつ
セーターは白フェラーリは赤の彼

雑詠 廣太郎 選

蜘蛛の囀の虜となりし星の数 大牟田 介弘浩司
 小判草不況知らずの音鳴らし 同
 貯炭場は坑史の墓標草茂る 同
 梅雨晴や昼も星ある筈の天 神戸 千原叡子
 蠍座に触れんばかりの黄菅の野 同
 大空の亀裂の如く星流れ 同
 船頭は鵜飼の陰の主役なる 東京 大久保白村
 鵜も鮎も人類うらむ鵜飼かな 同
 ナイターの灯に雨脚の見えてきし 同
 梅雨晴の雀そんなにうれしいか 相模原 木村享史
 明易の雀よ鳩よ老人よ 同
 竹皮を脱ぐ村人はみな老いし 同
 曇天のとろみ加へし夏の川 東京 橋本くに彦
 白い山赤青の峰かき氷 同
 雲ひとつ溜息ひとつ今朝の秋 同
 蒼天にひとつ日を謳歌する木槿 神戸 涌羅由美
 花木槿命掃かるる夕まぐれ 同
 紡績の史蹟を覆ひ蔦茂る 同

湖の上の一字の仏白蓮 奈良 古賀しづれ
 湖中句碑晩夏の波の寄りどころ 同
 蘆の間の魎蘆の間の近江富士 同
 敵味方共に眠らせ夏木立 神戸 山田佳乃
 聖地とは深々とある木下闇 同
 遠雷や千度石据う真田庵 同
 夏柳水の詩人のささめごと 香川 湯川 雅
 溜息も梅雨を乗り切る一手段 同
 跳ぶよりも跳ばざる距離ばつたの野 同
 乗りたがり下りたがる子のハンモック 龍ヶ崎 今橋真理子
 戻りたる誰もが開けて冷蔵庫 同
 新涼の人間国宝てふニュース 同
 上る汗とは又違ふ下りる汗 袋井 湖東紀子
 ハンモック我が重心のあり所 同
 膨らんで玉となりては滴れる 同
 木槿咲く一と日といふがつぎきり 熱海 嶋田一步
 太陽に目立つ木槿となりにけり 同
 散らずして凋む木槿の日々となる 同
 混み合へる空をこぼれて流れ星 東京 田丸千種
 十センチ曳けば大きな流れ星 同
 かたはらの星には触れず星流れ 同
 潮騒は海の吐息や浜涼し 松山 中野匡子
 子供の日暮れて大人の時間かな 同
 光る物光らせて売る夜店の灯 同

雑詠句評（十一月号より）

憲明・葉　・　静龍
中正・眞理子・とほ歩
肖子・保　佳・敦子
むつみ・廣太郎

風に散る花にも遠き旅路あり さかま 岡安仁義

木を離れる落花は、それぞれに行方をもつている。「遠き旅路」というので、吹き上つて空を流れる趣もある。水の流れのままにつづくこともあろう。地上にまろび、再び風に巻きあげられることもあろう。いずれは、場所を得て、土に帰するさだめ。この句の「花にも」には、人もそうだという詠嘆が重なる。遠い旅路、万象みなそうだという心にまで及んでいく。仏教では、「草木国土悉皆成仏」の教えがある。何処より来たりてまた何処に去るか。（憲明）

桜は散った時が終の姿であると思うのが一般的ではあるが、その散った花が風に乗る、又そこからその花の旅が始まると捉えた作者の感性が何と鋭い事だろう。考えるほどに、その花は又空を何万キロも旅をして、朽ち果ててしまった後も霊として生き続けているような錯覚にも陥る。（廣太郎）

逃げて欲し入つて欲しと蟻地獄 岡山伴 明子

蟻地獄は堂の縁の下や海浜の乾いた砂などによく見かける生き物で、その挿鉢形の穴は何とも親しみ易く興味深い。この句は、蟻地獄の穴のふちに差し掛かった蟻の情景であろう。作者はそれを見て、危ない、逃げて欲しい、と思う一方で、迎え待つ蟻地獄の気持を察して、入つて欲しい、とも思いながら、その瞬間を見届けようと、その情景を見詰めているのである。蟻地獄という季節が見事に詠まれた句である。（葉）

筆者が、蟻地獄を見付けると直ぐ蟻を入れるという趣味？がある、という事は多くの人を知つておられるようだが、確かにあの挿鉢型の巣に蟻が入る確率は甚だ低いのではないか。作者もそんな不思議な生態を、蟻の側から、又蟻地獄の側からの視点で複雑な心境を上手く詠んでおられる。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

春の山より立ち上る富嶽かな
 春の山よりの流れは楽を生み
 明日晴るる予報の喜雨の一日かな
 短夜や明日の草稿たしかめて
 病む君を思へば梅雨の憂さなど
 病む君の消息絶えて梅雨深む
 身を賭して花を見るこれ日本人
 藁に咲かせ如何にも老木なる
 迂曲るおわらの月も踊子も
 俯けばさらにうるはし踊笠
 心にも吃水線がありて梅雨
 梅雨深しどの木も語りそめんとす
 冬ぬくし人は輪廻を繰り返し
 伝統の川に千羽の鴨の来し
 夜遊びと言ふ吟行や星涼し
 甦る万象の色喜雨の中
 母と見し夜を重ねて月涼し
 今日もまた恙なく終へ月涼し

東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 同 和田華凜
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 福山 竹下陶子
 同
 神戸 千原叡子
 同
 金沢 藤浦昭代
 同

ハンカチの予備まで使ひきりし旅
 洗ひおく誰か忘れしハンカチも
 ハンカチにあの日かの日のありにけり
 門火ふと思ひ立つかに燃ゆるとき
 近道の空地抜け行く草いきれ
 ハンケチを借りて縁のはじまりし
 盆踊これからといふ街ぬけて
 ハンカチを洗つて干して旅一と夜
 茉莉花や母の所作ふと真似てみん
 またしても庭に出てみる天の川
 みづうみに残る明るさ山眠る
 窓といふ窓にあをぞら冬日和
 近江路を行くや麦秋また麦秋
 十葉や良葉の香を放ちをり
 無口にてハンカチーフはいつも白
 うすものにほんのりつつむ妬心かな
 百合の香に触れて夜風の濃くなりぬ
 一日を終へたる安堵木樫にも

神戸 三村純也
 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同
 東京 山田閨子
 同
 同 今井千鶴子
 同
 宝塚 水田むつみ
 同
 東京 今井肖子
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 東京 大久保白村
 同
 神戸 池田雅かず
 同

盆子選